

ブルネイ大学訪問記

鈴木陽一*

今年7月、ボルネオ調査会コタキナバル会議 (Borneo Research Council, 7th Biennial International Conference, 15-18 July 2002, Kota Kinabalu)の帰り、はじめてブルネイ大学 (Universiti Brunei Darussalam)を訪問した。私はブルネイ独立の過程についても研究しているが、これに関わる研究の近況を確かめようとしたのである。ブルネイの研究者も雑誌論文や学位論文などにこれに関わる業績を出しているが、すぐにはなかなか外に流通しないため、外国から最近の動向を知るのはなかなか難しいのである。

大学の雰囲気はマレーシアの大学というよりはシンガポール国立大学という感じであった。しっかりとした建物であったし、それらが回廊で結ばれていた。スタッフも研究職・事務職ともに外国人も多かった。歴史学科のスタッフはほんの数人であったが、結構活動的であると思う。特に有名なのは、フセインミヤ博士、ユーソフ博士らである。特にフセインミヤ博士の下記の著書は有名である。

Hussainmiya, B. A., *Sultan Omar Ali Saifuddin III and Britain: The making of Brunei Darussalam* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1995)

これは前国王オマール治世のブルネイの政体の発展を、イギリスと国王の関係に焦点を当てて

記したものである。今回フセインミヤ博士はいらっしゃらなかったが、サバ大学のサビハー教授の紹介で、ユーソフ博士に対応していただけた。

きわめて印象的であったのは、ここ5年で研究の雰囲気が変わりつつある、というユーソフ博士の発言であった。ブルネイ現代史は書きづらいところが多いが、それでも史料に基づいて書かれている限り、アカデミックな世界では問題にならなくなったという。その原因の一つにフセインミヤ博士の業績の貢献もあったという。実際、私やフセインミヤ博士が書いている歴史は、ブルネイがマレーシア編入を拒んで独立へと歩む過程であるが、それは対マレーシア関係の暴露のみならず、現体制批判にもつながりかねない微妙なものである。私がつっこんで、オマール国王はマレーシアの立憲君主よりはブルネイの絶対君主でいたかったため、彼はマレーシア参加を見送ったのではないか、と述べたとき、ユーソフ博士がむしろ賛成のそぶりを見せられたのには、驚きを禁じえなかった。

3日ほどの短いブルネイ訪問であったが、そのほかにも歴史センターなどにも行けて有意義な旅行であった。特に、ブルネイの歴史が自由に語れるようになったことは歓迎すべきことであった。

* 上智大学アジア文化研究所共同研究員